

## 日本中世史研究と南米への旅

愛知県立大学日本文化学部教授  
上川通夫

### 1

ほとんど何の関係もない、というのが行く前の実感であった。そして今も無理に私が専攻する日本中世史研究と南米への旅をこじつけようとは思わない。ただし私が2008年11月にあしかけ10日間、ブラジルとペルーに出かけたのは紛れもない事実である。全く以て個人の体験であるに過ぎないが、いかにもミス・マッチなこの体験について、せっかくのことだから少しは文章として整理しておくことで、ひょっとしたら瓢箪から駒といった発想上の幸運に結びつくかも知れない…と書いて、やはり強弁を含んでしまうが、多文化共生、歴史文化、日本中世史、といったことを念頭において感想文を記してみたい。

ただその前に、その4か月前には思いもよらず、いわば降って湧いたように南米行が現実のものとなった事情と旅程についての概略は、記しておかなければならないだろう。

「平成20年度年度魅力あふれる大学づくり事業」に募集があったのを幸いに、「学術交流協定締結のための情報交換及び打ち合わせ、ならびに日系社会の視察及び交流」という計画を申請し、認められて渡航したのである。私の所属する文学部日本文化学科は、すでに韓国の湖南大学との協定

の窓口になっていて、毎年だいたい2名ずつの留学生を派遣しあっている。これに加えて、近い将来、ブラジルとペルーの大学と協定を結ぶ計画を考えたのである。もちろん蝸壺勉強タイプである私などの発想ではない。同僚の川畑博昭さんの勢いに同調した格好である。南米を対象とする比較法学を専門にされていて、聞くも驚く内容のペルーでの生活経験をもっておられ、愛知県立大学への思い篤い川畑さんの、希望溢れる将来展望に、心地よく乗せてもらった。

ブラジルでは、サンパウロ大学の哲学文学人間科学部教授・日本文化研究所所長の Junko Ota（織田順子）先生を訪ねた。ブラジルでは5泊した。ペルーでは、リマのカトリカ大学の副学長 Marcial Rubio Correa 先



リマで夕食 日本大使館の方々と

生を訪ねた。ペルーでは2泊した。それぞれ、意見交換や相談事はとても有意義に思えた。互いの事情を説明し、内容ある計画を現実に進めるための信頼関係をつくるための、確かな第一歩を踏み出した。極めてまじめかつ積極的に、目的の仕事を遂行してきたという実感がある。

ただし、ブラジルではポルトガル語を、ペルーではスペイン語を、自在に操る川畑さんの一人舞台であった。相手方を含めて、川畑さんこそ会話の中心であった。予想通り、予定通り、私はツッコミもしない相手として傍らに座っておった。

## 2

ほとんど何の関係もない、というのは不勉強者の思いこみであった。少し考えると、先学の中に、ペルーでの見聞を生かした日本中世史研究者がおられることに思っていた。

網野善彦氏は、個性的な日本中世史研究として広く知られていると思う。網野氏は、

自由・平和をめぐる人類史の中に日本中世史を位置づけられた。原始以来の普遍的価値が、文明化への一大転換期としての13世紀後半から14世紀にかけて衰退し、動乱と葛藤の中で、自覚的・意志的な自由・平和への希求が民衆生活の底から芽生え始めたという。丹念な実証に裏づけられた歴史的事実を根拠として、未来への希望と自覚を促す史論を残されたのである。その網野氏の、西洋中世史家の阿部謹也氏との対談、『中世の再発見』（1982年、平凡社。1994年に平凡社ライブラリーとして再刊）には、冒頭に「ペルーでの体験から」という一節がある。50歳にして初めての海外体験として語られた網野氏の話は、要所を衝いている。ペルー社会には「自力救済」と言うべき性質が見受けられること、生き生きした子供や市で活動する女性が目立つことなどに、日本中世と共通の原理を見いだすことができるという。人間らしい普遍原理を探り出す糸口の一つとみておられるのである。

一方、網野氏は、『「日本」とは何か』



カトリカ大学 Correa 先生と

(2000年、講談社。2008年に講談社学術文庫として再刊)において、稲作定着民・単一民族・国境・文字言語といった要素の過大視を、天皇制日本国家と不可分の抜きがたい政治的偏見として批判し、多様な生業に即した人的交流の実態や、個性ある地域社会の形成史などを、膨大な史実を提示して説得的に語られた。内海が人間の移住に果たした役割が強調され、日本海や東シナ海を通じたアジア大陸と日本列島のつながりだけではなく、太平洋を渡ってアメリカ大陸と交流したであろう実態への確信ある推論が展開されている。しかも実際、ペルーのリマで行われた17世紀前半の人口調査記録に、「ハポンのインディオ」20名のこと記載されている事実などを特筆されている。また日系移民天野芳太郎氏がリマに設立した天野博物館に、モチェ文化(3~8世紀)の人面彫刻土器が展示されていて、その一部に、東アジア系かと思わせる面相があるという説を紹介されている。

これらのことは、旅行から帰って調べ直し、思い出した。すでに、「ほとんど何の関係もない」などと言っではいけない研究段階のである。

とはいえ、日本中世史研究者の網野氏が南米での見聞を自身の研究に結びつけたというのは、今のところは珍しい事例だと思えていいだろう。なかなかそううまくいくとは思われない。直線距離1万5千キロを隔てた地域の、400年以上前の時代である。日本中世と南米の歴史的な世界とを結びつける史実は、簡単には発見することができないように思う。見識に差異があるに違いない。しかし私にはやはり南米はととても遠かった。そのことは帰ってから今にいたるまで実感に変化がない。しかしやはり、せめて歴史研究の心構えといった次元では、網野氏の矚みにならう努力をしてみてもどうか、と自分に問いたくなる。

### 3

比べるのははなはだ気が退けるが、私の日本中世史研究はいたって視野が狭い。一応は6世紀から12世紀までを考察範囲とするものの、国家史や社会史との関係で宗教史に焦点を合わせるに過ぎず、「日本」という単位の生成と定着の問題を歴史的に問おうとする発想から、東アジア世界を考慮する程度である。しかも実際は、10世紀から12世紀の、日本中世仏教形成史に照準を合わせてきた。文献史学の方法を採り、デスク・ワークに汗をかき、これまで外国へは研究外の目的で3回行ったことがあるだけである。

世界史についての素養や見識はない。仮に努力していたとしても、南米史に届いていたかどうか。フォルクローレを聴くのが好きで、中学生の頃ペルーから来日した有名奏者のコンサートに行ったことはあるが、ケーナを吹いたことはない。

急浮上した渡航計画だったこともあって、歴史や文化を理解するような旅行の下調べはほとんどできなかった。割り切って、自分の勉強と結びつけることをせず、出発直前まで追われていた中世史研究から、むしろキッパリ離れてみる経験にしようと思った。長旅を覚悟して手にしていった本は『吉田一穂詩集』一冊。初夏の南米では場違いである。

南米には実に多様な人々がいる。高校時代に地理で習った通りだ。しかし今回の旅では日系人と会うことが多かった。

ブラジルやペルーに日系移民が生活していることは、一応は知られていることであろう。地球の反対側でのことだが、現地で日系社会に出会うことは、やはり衝撃的な体験だと思った。歴史と現実、間接と直接、いろんな次元で自分の存在と関係がある、

という思いを身近に抱かせられるからである。実際に日系社会に触れ、サンパウロのブラジル日本移民史料館やリマの日本人ペルー移住史料館を見学し、近現代史の大事な一面を知った。移民史は、一方では南米と日本に限る問題ではない。地球規模で連動する近現代史を考えさせ、人類史の将来展望と関係する問題を突きつける。他方では、より身近な問題である。ことに移民の多い愛知県にとって、将来の歴史文化を創る場合の重要問題をそこに認識させる。短期間の見聞で、無責任にこれ以上は言えない。私個人としてはもう少し知見を広めたいと期するのみである。

けれども近現代史の回顧や将来の展望が大事だと考える一方で、どうしても前近代史が知りたくなる。日系移民史が始まるよりずっと以前、南米にポルトガル人やスペイン人が入ってくる過程、それ以前、さらにそれ以前。近代ヨーロッパ人が来る以前の王国についての、悠久、太古、粗野、澁刺などの勝手な想定は、ポスト・モダン論による紋切り型批判の対象にさえなりそうである。歴史過程の実際がどのような特徴があるのか、不勉強というより、無勉強とでもいべき自分にとって、自発的な関心が初めて湧いたように思ったのは、旅の終盤、ペルーにおいてである。征服者の言語や宗教が日常化した様子を目の当たりにするにつけ、自らの位置を了解する手だての一つとしての歴史認識が気になりだした。

なかば俗説としても言われるほどのことだが、現代の日本人は歴史意識というべきものが非常に薄いという。事実がどうあったかということにさえ、知ること、理解すること、直視することを軽視する傾向にある。

通常、われわれはなにか事が起こるとそ

れをよく調べ、その起源をたずね、その歴史をたどる。そして、こうして知識を獲得したうえで、内なる志向に従って、何を為せばよいか、何を為すべきかを立案し、自ら進んで元気いっぱい、実行に乗り出すではないか。（B・クローチェ『思考としての歴史と行動としての歴史』）

こういったことが、確かに日本では聞かれない。事実を相対視するという逃げ口上で、怠惰にも調べる労力を回避しているだけの評論も、近時の幕僚長の「論文」と同根のように思える。日本とは違い、外部からの侵略を経験した南米では、どうなのだろう。ヨーロッパやアフリカからの来住者、後住者に対しての先住者、日系移民、それぞれの歴史意識にはどのような内容と特徴があるのだろう。

サンパウロの日系人で、愛知県人会の幹部の方々に暖かく接していただく機会があった。気さくであり、また独特のプライドあるその方々は、ブラジルの個性ある住民なのだと思う。愛知県人会館を案内していただいたが、その一階は、小学校の体育館の半分ぐらいのスペースがある、立派なホールだった。聞くところでは最近、県人会の前会長のお兄さんが、日本史についての講演会をされて、大勢の人が来て大好評だったという。とっても驚いたが、その内容が忠臣蔵だったと聞いてまた驚いた。

19世紀後半の移民政策で渡った方の子孫だけでなく、戦後の日系移民もおられるが、100年前とは言わないまでも、古い日本の生活風習が保存されているとは聞いていた。日系移民の歴史意識についてはすでに研究されているはずである。川畑さんは、私に、いつか愛知県人会で歴史の講演をするよう勧めてくださいるが、内容を決めるのはなかなかむつかしいだろうとも思う。

思いめぐらすのはこの程度であるが、やはり旅先でも、その見聞を歴史研究と結び

つけようと模索していたらしい。

#### 4

サンパウロでもそうだが、リマではなおさら冷汗かいて驚いたのは、すさまじい車の運転事情である。クラクションもウインカーも、日本などとはまるで使い方が違う。自己主張の衝突がよくわかるが、車の衝突はかろうじて回避されている（ようである）。無秩序に見えて、秩序があるのかもしれない。そここのところは、短い滞在ではつかみきれなかった。

帰ってから落ち着いて南米体験を思い返す。多文化共生社会の洗礼を受けたというべきかも知れないが、衝突すれすれの雑踏や深刻な歴史体験の痕跡に触れたことをな

おうまく表現できない。一方で、日本列島内の文化も多元性や動態性をもつことについて、頭の中でしばしば確認する。またこここのところ、南米の記憶を抱えて読書することがある。上野千鶴子『国境お構いなし』、ランケ『世界史概観』、南原繁の政治哲学史、河音能平の世界史の中の平安時代史論、網野善彦の人類史。

どうも南米体験が私に与えた関心は、「多角的歴史文化のゆくえ」ということであるらしい。そのことが日本中世成立史研究とどう結びつくか、まだ臆気なので書くことができないが、次の15年間の研究課題を定めようとしていた私には、少し晴れ間が見えてきたような気がしている。

長く退屈だった飛行機での苦痛については忘れつつある。（2009年2月10日）



サンパウロの愛知県人会の方々

## ■筆者プロフィール

上川 通夫 (KAMIKAWA Michio) 愛知県立大学日本文化学部教授

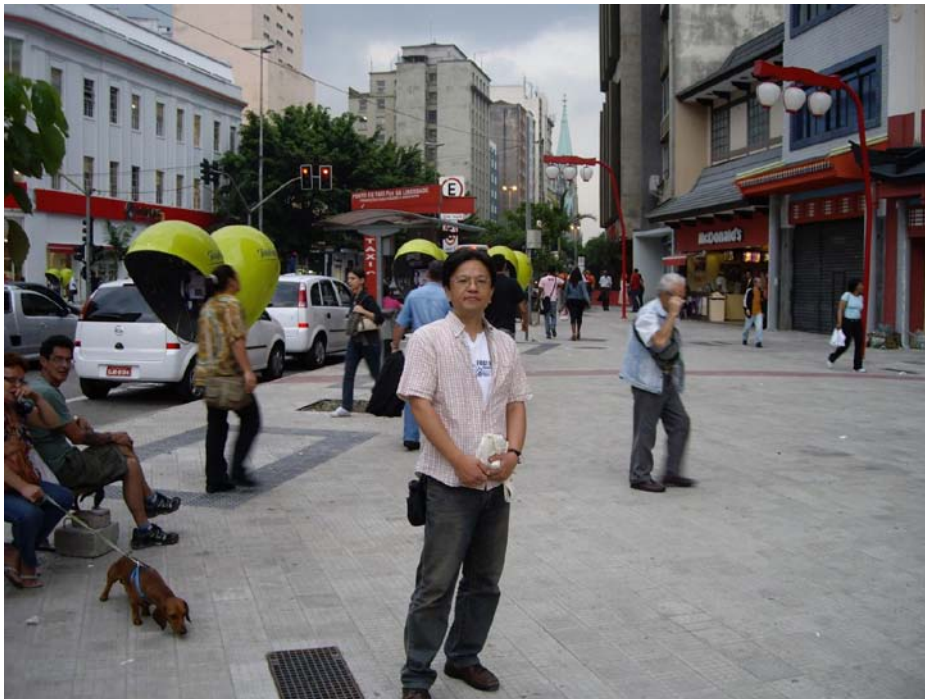
1960年大阪市生まれ。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（1989年）。日本中世史が専門。博士（文学）。

これまでの研究は、日本中世成立史で、特に宗教史に重点を置いてきた。これからの研究は、平安時代史で、特に次のテーマを探求している。

1. 日本中世の宗教と国家
2. 古代から中世にかけての仏教についての国家史的研究
3. 中世の宗教文献研究

多文化共生については、「多元的な歴史文化のゆくえ」として捉えてみたい。  
主な著書は下記の通り。

1. 『瀬戸市史 資料編三 原始・古代・中世』（共著、2005年2月）
2. 『瀬戸市史 通史編上』（共著、2007年2月）
3. 「日本中世仏教の成立」（『日本史研究』522、2006年2月）
4. 『日本中世仏教形成史論』（2007年10月、校倉書房）
5. 『日本中世仏教資料論』（2008年2月、吉川弘文館）



サンパウロの街で